

現在を生きるかつての「日本人」(2) —母語を奪われた人— その1

佐藤貴仁 (亜細亜大学非常勤講師)
(元・交流協会台北事務所日本語専門家)

1. 陳さんからの手紙

夏の終わりに、玉蘭荘¹の会員である陳志明さんから手紙が届いた。陳さんは、日本統治時代に〈日本人〉として、日本語で教育を受けた80代の台湾人男性であり、また、これまでの人生を聴き、それをまとめるために、私が継続してインタビューを行っている人物でもある。受け取った手紙の内容は、「最近体調が思わしくない」ということが切々と綴られていた。それは、これまでの3回のインタビューから受けた印象とは対照的な、気弱とも思える文体であったため、その状態が切々と綴られていた。弱々しくなった彼の姿を想像して心配してしまったが、それ以上に、私自身が動揺していることに、正直、自分でも驚いてしまった。どうしてかと考えると、それは、最悪の場合、もう会えなくなってしまうかもしれないという悲しい気持ちの表れだったのかもしれない。さらに、彼のストーリーをまだきちんと文章にできていない自分に対する不甲斐なさも加わり、もしこのまま床に伏してしまうようなことがあれば、せめてその前に一目会えないかと思ひ、いても立ってもいられず、急遽台湾へ向かうことにした。

あいにくその日は、週2回ある玉蘭荘の活動日に当たってしまったため空港から直接足を運んでみたのだが、驚いたことに、いつもと変わらない陳さんの姿があったのである。他の方々も元気そうで、半年前に訪れた時と何一つ変わってないその風景に、いささか拍子抜けしてしまったが、彼をはじめ会員のみなさんが、久々の再会を喜んで

くれたのを見て、安堵の気持ちでいっぱいになった。

暑い盛りの頃は、身体が本当に辛かったと言う陳さんは、今では体調も比較的落ち着き、また玉蘭荘の活動に参加しているとのことだった。しかし、家には彼自身による介護が必要な夫人がいるため、活動が終わると一目散に帰っていくのが常である。従って、その日も活動後に二人で話をすることはできなかったが、帰る間際に私に近づき、滞在中に一度時間を作ると耳打ちし、家の事情があるにも関わらず、活動日ではない曜日にわざわざ玉蘭荘まで出向き、面談の機会を設けてくれるという心遣いを見せてくれた。数日後の面談の日には、事前に送っていた以前のインタビューの文字起こし資料にチェックをして持って来てもらい、二人でその内容を確認した後、結局、最後のインタビューをすることにした。なぜなら、これまでのインタビュー内容をまとめているうちに、最後に一つだけしっかり聞いておきたいことが出てきたからだ。それは、晩年になって深く関わるようになった玉蘭荘という場所に、多少無理をしても、なぜ未だに通い続けているのかということである。

2. 玉蘭荘と家族の繋がり

陳さんが玉蘭荘に通い始めたのは2000年だったが、施設の存在については、それより以前から知っていた。なぜなら、かつて陳さんの夫人が、開所間もない1990年代前半の創設期に、ボランティアとして玉蘭荘で活動していたからである。

¹ 台北市にある高齢者を対象とした日本語で活動を行うデイケアセンター。通所タイプの施設であり、週に2回、午前から午後にかけて、さまざまなプログラムを元にした活動が行われている。URL:<http://www.gyokulansou.org.tw/>

その後、体調が思わしくなくなった夫人は、ボランティアを卒業することになり、それと入れ替わるように、今度は、夫人から紹介を受けた陳さんの弟が通所するようになった。だが、その弟もほどなくして他界してしまったのだが、その際、世話になった玉蘭荘に「お礼を言いに来た」のをきっかけに、今度は本人が通うようになった。その時のことを「弟の名残りというか、弟を思い出すために、ここに来た」と、陳さんは語っていたが、続いて「私もやっぱり、そろそろここに来ようかと思っと思ったんですよ」と話し、現在まで継続して通所していることから、それ以降は自分の意志で玉蘭荘に関わっていることが分かる。

このように、夫人から弟、そして陳さんへと、玉蘭荘との繋がりが引き継がれたのだが、関係している家族はこの限りではない。実は、陳さんの母親も、玉蘭荘がかつて行っていた在宅訪問によるケアを受けていたのである。その陳さんのお母さんについて、当時、訪問ケアを行っていたスタッフが、本人について以下のように言及している。

陳さんのお母さんは、日本の教育を受けたことを本当に誇らしく思っていて、それが人生で一番輝いていた時期だったっていうことを何回も、何回も、繰り返しておっしゃっていました。もう、昨日のこのように、本当に目を輝かせながらね、何回もそれを話されたんです、私に。お母さんの住んでいらした所に、ずーっとお訪ねしてね。今でも、本当に思い出します。陳さんとはあんまり、そういうお話したことはないけど、お母さんとは本当にね。もちろん、中国語もできるし、台湾語もできるし、才女だからしっかりと人生もやっ

てきた方なんだけど、お訪ねした時はいつも昔を思い出しながら、気持ちの上で女学生に戻って、「もう、女学校時代が一番！」という感じで凄くね、話されたんです。

この話から、陳さんのお母さんもかつて〈日本人〉女学生として青春時代を過ごし、その頃が「人生で一番輝いていた時期だった」と話していたことから、その時代の環境や自分自身に、相当の思い入れを持っていたことが判る。一方、陳さんのお父さんも内地留学を経験し、東京の高等教育機関を卒業していることから、同時代の台湾人の中でも、「日本向き」であったと言えるだろう。このように、当時の台湾人としてはエリートの道を歩み、日本教育により深く関わった両親を持ったこともあり、「全部日本語で、家庭教育をやっていました」と陳さん自身が証言するように、その生活にも日本語が深く浸透していたようである。実際、一家はのちに国語家庭²に認定されている。この制度は、模範的な日本国民として生活しているか、政府が審査するもので、認定された家庭は、配給制度の下においては統制物資の割当が日本人家庭と同等になることや、その家の子弟は、原則的に日本人が就学している小学校に通うことが許されるなど、優遇的な措置を受けることができた。

そのシステムに従い、陳さんは出自が台湾人でありながらも、公学校ではなく小学校に通った。よって、学校では多くの日本人の友達に囲まれ、家庭内でも、日本語を使用し、さらに、改姓名³による日本風の名を名乗っていたという当時の状況から、陳さん本人は自身を〈日本人〉だと認識し

² 「国語常用家庭制度」の略。1937年より展開された「国語常用運動」により、台湾人家庭を対象に、日本語レベルならびに日本国民として模範的な生活が送れているかという基準が設けられた。政府の審査によってこの基準に達していると判断されると、「国語家庭」として認定され、家の表札に「国語家庭」という鑑札を掲げることになっていた。1942年のデータによると、「国語家庭」認定家庭数は9,604戸、その家族数は77,679人（総人口比約1.2%）となっている。（蔡1989:p.507）

³ 1940年に始まった「改姓名運動」と呼ばれる、台湾人の姓名を日本風に改めることを政府が奨励した運動。許可制を取り、強制的に実行されたものではなかった。

ていたという。当時は日本人のようにすることが、半ば奨励されていたような時代において、その模範として認定された国語家庭の子供であれば、そう思うのも当然だったのかもしれない。しかし、だからといって、自分の出自が台湾人であるという事実は消し去ることができない。自分を〈日本人〉だと認識している一方で、陳さんはこの事実とどのように向き合ってきたのだろうか。

3. 揺れ動く帰属意識

「自分は、もうてっきり日本人と思っていたから」と、当時を振り返って語る陳さんは、台湾人だという意識もほとんどなかったという。それは、終戦間もない頃にあった、宗主国から敗戦国になった日本の子供と、被統治側からの逆転を味わった台湾の子供の諍いについて語った内容から窺い知ることができる。

「うーん、わたくしたちも学校から帰る時、逃げましたよ、台湾人に追っかけられて。そして、日本人と見間違われて、話をしようと思ったら、台湾語が言えないから、やっぱりいじめられそうになりましたよ。仇討ちみたいな。『お前、なんか威張り散らしていた!』って」言われたというエピソードからは、自分が〈日本人〉側にいたという視点で話していることが分かる。実際には威張り散らしていた訳ではなかったが、台湾人でありながら小学校に通っていたという事実が、自分は一等国民の〈日本人〉と同等であるという、ある種のエリート意識のようなものを植え付けていたと、当時を振り返って、発言している。よって、そうした意識が、その大部分が公学校に通う台湾人子弟にとって、何となく鼻につくものであったと想像することもできる。事実、人格的な部分においても、「私たちは精神的に日本人で、彼らは台湾人の精神を持ってる。やっぱりどこか違うところがあるんですよ」と語っていたことから、陳さんの置かれた環境が、自らの〈日本人〉だという

意識を助長させたのかもしれないとも考えられるだろう。これらは、すべて1回目のインタビュー時に語られたものである。

ところで、私は、予め複数回行うことを前提としたインタビューをする場合、初回は、開始前にその趣旨を伝えるのみに留め、特に質問を想定せず自由に語ってもらうことにしている。その中で、語りのテーマとなるものや話題に上ったことなどを元に、2回目のインタビューに臨むからだ。陳さんの1回目のインタビューにも、語りのポイントがいくつか現れたのだが、その中の一つが、自分は〈日本人〉なのか、台湾人なのかという〈揺れ動く帰属意識〉であった。前述のとおり、当時、原則的に台湾人子弟が一方、日本人ならびに、国語家庭などの特例により許可された台湾人子弟だけが小学校に通っていた。そのため、小学校では必然的に台湾人は少数派となり、陳さんによると、当時のクラスに「7人しかいなかった」という。だが、その事実を振り返るうちに、1回目のインタビューでは、「自分は、もうてっきり日本人だと思っていた」としか言及していなかった陳さんが、2回目のインタビューでは、前回とは語り方を変えて話している。それは少数派の台湾人の立場において、いじめられたりしなかったのかと、私が訊いてからの一連のやり取りに見て取ることができる。

*：その、小学校の中で、台湾人だということで、何かこう、いじめられたりとかってのはあったんですか。

陳：ないですね。彼ら【出自を】知らないから。

*：あー、改姓名してたから？

陳：そうそうそう。それに私は、あの一話す言葉とか、全然あの一、あれ【=訛】はないです。【日本人と】変わりはないです。

ここで陳さんは、自分が規範と考える〈日本人

の日本語)と〈自らの日本語)を対照し、自分の日本語には台湾人と判るような訛がなく、日本人が話すのと変わらないと発言している。しかし、仮に自分が完全に〈日本人〉だと思っていれば、このような発言は出てこないのかもしれないだろう。なぜなら、当然のように日本語環境で育ち、自らの出自を疑うようなこともない生粋の日本人であれば、自分の日本語を、他の基準に照らし合わせて気にすることもないと思われるからである。よって、裏を返せばこうした言動は、心のどこかに、自分は台湾人であるという意識によるものだと、受け取ることもできるのではないだろうか。

*：あ、でも一応改姓名をしていますが、誰が台湾人かという事は、みんな知っている？

陳：知ってる人もおるかもしれない。一般的には知らない。

*：あー、そうなんだ。

陳：はい。

*：ふーん。あ、その学校の人とかは、知ってるかもしれない？

陳：それを意識してる人は、知ってるかもしれない
//*：うんうん//あんまり...子供だからそんなこと、あんまり意識しないでしょ。

*：そうですね。関係ないですからね。

このやり取りでは、自分は頑なに〈日本人〉だと思っても、常に周りに正真正銘の日本人である級友に囲まれている状況から、逆に自分が台湾人であることを意識せざるを得ないことも伝わる。なぜなら、陳さんが台湾人であることを「意識している人は、知っているかもしれない」という状況は、自分が他者から常に、台湾に出自を持っている人間だという目で見られているかもしれないという、意識の形成に繋がるのが想像できるからである。それは、続く発言に、端的に現れて

いる。

陳：その代わり、心の中では、自分が台湾人であることを知らせたくない。

*：あ、そうですか。そういう気持ちがあった？

陳：はいはい。そうそう。

*：それはどうしてですか。

陳：それを少し恐れている。

*：あー、そうですか。え、どうしてですか。

陳：あの一、軽蔑されるから。

*：あー、やっぱりそういう目で見られるから？

陳：そうそうそう。そういう目でね。その事実は、いろんなところで見られるから//*：うん//台湾人をけけなしたり、悪口言ったりするから、友達が学校で//*：学校以外の場所でも？//はいはい。

*：ふーん。

陳：だから台湾人と判ったら嫌われる//*：うん//という恐れを持っている。

*：そういう気持ちはあったんだ。

陳：はい。

*：へー。じゃあ、一生懸命

陳：そう、だから一生懸命勉強して、ええ、一生懸命努力して、だから//*：地道に？//だから先生にも認められたわけで。

*：うん。そうなんだ。

陳：事実、頭は大したことない。

*：いやいやいや(笑)。

1回目のインタビューでは、自分は〈日本人〉だという認識を持っていたという発言に留めていた陳さんが、上記2回目のインタビューでは語り方を変化させ、「自分が台湾人であることを知らせたくない」と話し、それが露呈することを恐れていたと語っている。そこには、自分は〈日本人〉だという意識と、いくら小学校に通い、家庭でも日本語を使い、身も心も「ほとんど日本人の生活」

をしていても、一方で絶対に消し去ることのできない、出自が台湾だという事実の狭間で、やはり陳さんには葛藤があったことが窺える。そのギャップを埋めるかの如く、「一生懸命勉強して」先生にも認められたことにより、クラスの副級長にもなった。しかし、元々日本人子弟のための教育機関である小学校では、特例により入学が認められた台湾出自の子弟が、いくら品行方正で優秀な成績を修めたとしても、決して級長になれることはなかったのもまた事実である。こうした現実も、否応なく自分の出自を意識させられてしまう要因の一つであったのかもしれない。

このように、〈日本人〉だが、生粋の日本人ではない、出自は台湾人だが、純粋な台湾人ではないという複雑な状況を誰かに説明するのは、本人にとっても非常に難しいことであるのは想像に難くない。例えば、1回目のインタビューでは、自分を〈日本人〉だと思っていたとしか言及することがなかったが、2回目では、自分は台湾人でもあるが、周りにそれを知られないよう、〈日本人〉に見られるように努めていたという語りが出てきた。これは、インタビューにおける聞き手・語り手のラポール形成によるものや、あるテーマについてさらに掘り下げて話すという、インタビュー自体の深まりにより出てきたものだとも考えられるが、一方で、その内容の〈語り得なさ〉からきているのかもしれないと考えることもできる。それは、自分でも説明がつかないことは、積極的に開示しないだろうとする考えだが、やはり、その

感情にうまく言葉を当て嵌めることができない〈語り得なさ〉は、結局のところ、自分でもどちらとも言えない、よく分からないものなのかもしれないのだろう。なぜなら、このやり取りのあとに、より日本人らしい日本人になるために努力したのか、という私の質問に対し、「特に日本人になろうとは思ってない。元々日本人と思ってるから」と陳さんは答えているからである。「台湾人と判ったら嫌われるという恐れを持っている」と話した直後に、「元々日本人だと思ってる」と発言する、〈揺れ動く帰属意識〉に伴って現れる、自分は〈日本人〉なのか、それとも台湾人なのか。このどちらでもあり、どちらでもないとも取れる意識は、日本統治終了後に大きく社会が変化した戦後以降も続くことになる。

(その2に続く)

【記述の説明】

本文中における文献や文字化資料からの引用は「 」で表し、強調したい言葉や表現は〈 〉で示した。また、文字化資料における*はインタビューである筆者を表し、//はインタビューとインタビューの発話の重複部分を、[]は筆者による補足説明であることを示している。

【参考文献】

蔡茂豊 (1989) 『台湾における日本語教育の史的研究:一八九五年～一九四五年』
東呉大學日本文化研究所